

ワークショップ

日本における臨床心理学の導入と受容過程 2

話題提供者 東北女子短期大学 鈴木祐子
筑波大学 安斎順子
横浜国立大学 鈴木朋子
指定討論者 東洋大学 恩田 彰
司会 専修大学 藤波尚美
企画 岐阜聖徳学園大学 小泉晋一
立命館大学 荒川 歩
日本心理学会 心理学史研究会

本記録は、日本心理学会第 69 回大会の一部として、2005 年 9 月 11 日に、慶応大学で行なわれたワークショップを元に、加筆修正を加えたものである。肩書きは当時のものである。

企画趣旨

岐阜聖徳学園大学 小泉晋一

今日はこのワークショップにお集まりいただきましてありがとうございます。昨年からの企画をしております今年で二回目になります。臨床心理学の歴史というのは非常に幅広く、膨大なものです。この莫大な歴史の中から、少しずつでも研究知見を集めて、それらをまとめて発表していくことが本ワークショップの主旨でもあります。例え小さな研究成果でも、それが積み重なれば大きな成果につながるのではないかと考えています。

臨床心理学の歴史全体を網羅することは難しいのですが、ある特定の領域を深く掘り下げて考えるような機会があっても良いのではないかと考えています。そのような意図もあって、今年には戦前までの精神分析の歴史についての特集を企画して

みました。このように毎年、何かのシリーズを特集した企画を行っていきたくと考えています。心理学史研究会の中だけでも、精神分析の歴史についての研究が数多くなされておりますので、これから話題提供の先生方に研究の成果についてのお話をさせていただくことになります。

日本の精神分析は、西洋とは異なった発展をしています。西洋では、メスメリズムから催眠術を経て、さらに催眠術から精神分析へという成立過程を経たのですが、日本ではまったく異なった成立過程を辿っています。日本でも明治時代に催眠術が非常にブームになりました。ここでは敢えて「催眠術」と言わせてもらいますが、この催眠術は一般大衆の中でも広まって流行しました。良くも悪くも催眠が広く認識されていた時代でした。しかし、催眠の認識や受容が精神分析の受容に直接つながったわけではありません。西洋では催眠術の発展の結果として精神分析があるのですが、日本では催眠術の発展として精神分析が誕生したわけではありません。むしろ日本では催眠術の発展の結果として霊術が生まれました。霊術については前回のワークショップでお話しましたのでここでは詳しく話しませんが、少なくとも西洋と日本では精神分析の定着過程が異なっているのです。

日本に精神分析が入ってきた最初の頃は、まず学説の紹介が行われていました。日本で精神分析の学説について初めて言及された論文は、明治 36 年(1903 年)に佐々木政直が『哲学雑誌』に掲載した「ステーリング氏の心理学に関する精神病理学」であるとされています。精神分析の学説を本格的に紹介した論文には、蛎瀬彦蔵による「米国に於ける最近心理学的題目の二三」というものがあり、これも『哲学雑誌』に掲載されました。蛎瀬はアメリカ留学中の明治 42 年(1909 年)にクラーク大学でフロイトと出会った人物として知られています。

その後、大槻快尊が『心理研究』という雑誌に「もの忘れの心理」を発表しました。大正元年(1912 年)のことです。大槻はその後も『心理研究』に「やり損ないの心理」を発表してフロイトの学説を紹介しました。大槻快尊については、話題提供者の鈴木朋子先生が詳しく調べて、論文にも発表されていますので、本日はお話が聞けるのではないかと思います。

単行本として最初に出版された精神分析の本は久保良英の『精神分析学』でした。久保良英はクラーク大学のホールのもとに留学した経験もあり、精神分析について

触れる機会が多かったと思います。久保良英の業績についても、鈴木朋子先生から詳しいお話が聞けることと思います。

『哲学雑誌』という専門雑誌から、『心理研究』という一般の人々も読むような雑誌で精神分析が紹介されてきたわけです。1917年には『変態心理』という雑誌が刊行されました。中村古峽という人が主幹で、中村らの手によってフロイトやユングの学説の紹介や翻訳がなされています。『変態心理』で活躍した中村古峽や小熊虎之助の業績については安齋先生がお詳しいと思います。

精神分析の学説は、『哲学雑誌』『心理研究』『変態心理』などの雑誌によって紹介されて、普及しました。精神分析には、自我やエゴといった独特の概念があります。我々は、エゴと聞けば自我とすぐに訳すことができます。また無意識という概念は精神分析の主要な概念です。これらの精神分析の訳語や「無意識」の概念が日本に定着していったプロセスについては、話題提供者の鈴木祐子先生に詳しくお話いただけたと思います。

このように、精神分析の学説は雑誌や本を通して紹介されてきましたが、精神分析が普及する経路にはもう一つ別の経路がありました。それは、精神医学の一分野として精神分析が導入された過程があるのです。まず丸井清泰という人がジョージ・ホプキンス大学でマイヤーから精神医学を学び、そのときに精神分析に関する講義を聴いたことが知られています。帰国後、丸井は国際精神分析学会仙台支部をつくり、東北帝国大学医学部で精神分析に関する雑誌を刊行しました。それは『東北帝国大学医学部精神病学教室業報』という学術的な雑誌で、副題が「精神分析論叢」とされています。1932年に刊行されました。

丸井清泰の弟子の古澤平作は1931年にウィーンへ留学して、帰国後に治療法としての精神分析を定着させました。戦後、古澤平作が日本で精神分析を広めていった業績はたいへん大きくて、それを度外視することはできないとは思いますが、今回のワークショップでは、戦後、古沢先生が日本に精神分析を発展させたプロセスに主眼を置くのではなくて、明治・大正・昭和初期の精神分析に関する話になると思います。

丸井清泰と古沢平作は医学者でしたが、精神分析の導入は医学者でもなく心理学者でもない人たちからもなされました。その中心的な人物として大槻憲二がいます。

大槻憲二は、矢部八重吉や長谷川誠也たちとともに、1928年に精神分析研究所を設立して、1933年に『精神分析』という雑誌を出しました。『精神分析』が刊行されたのは、丸井清泰が「精神分析論叢」を刊行したのと同時期です。日本ではこの頃から、精神分析が一般に普及される下地ができつつあったのかもしれませんが。

戦後に精神分析が広がっていった過程について簡単に説明いたしますと、戦後は精神医学を中心に精神分析の受容がさらに進んだ時期でもあります。特に戦前戦後の時期における古澤平作の活躍は目覚ましいものがあります。古澤がオーストリアのウィーン精神分析研究所に留学して帰国したのが1933年で、1934年には東京で古澤精神分析学診療所を開業しました。当時は日本で唯一人の精神分析開業医です。古澤のもとで懸田克躬や土居健郎、小此木啓吾などが学び、古澤は多くの精神分析医を育てました。1949年に懸田克躬らと精神分析研究会を設立して、1952年に『精神分析研究会会報』を発行しています。1955年には日本精神分析学会を発足させて、初代会長となりました。国際精神分析学会日本支部長も兼任しました。このように古澤は日本の精神分析界をリードしました。

このワークショップのテーマは日本の精神分析の歴史ですが、最後にもう一つユングの心理学が日本に導入された経緯についても簡単に説明しますと、蛎瀬彦蔵はクラーク大学で聞いたユングの連想実験のアイデアを、1911年に米国留学の報告という形で紹介しています。安斎先生の論文によれば、日本で初めてユングの論文を翻訳したのが小熊虎之助です。小熊はユングの論文を全訳して、「精神病学における人本主義運動」という題で『心理研究』に掲載しています。ユングの著作の翻訳は、中村古峽と小熊虎之助の共訳による『連想実験法』が最初だと考えられています。これは1926年のことです。その後もユングの論文の翻訳や紹介はあったようですが、ユングの理論の日本への本格的な導入は戦後を待たなければなりませんでした。

フロイトやユングの理論が日本に本格的に根づくようになるのは戦後になってからだと考えられますが、精神分析が受容されるには、それに先立って日本人に自我や無意識といった概念が理解されていなくてはならないと考えられます。最初にこの無意識や自我などの概念が日本に定着するプロセスについて、鈴木裕子先生にお話いただければと思います。鈴木先生、よろしく申し上げます。

(参考文献：佐藤達哉・溝口元(編) 1997 通史 日本の心理学 北大路書房)

精神分析導入前の「自我」と「無意識」を素描する

東北女子短期大学 鈴木祐子

東北女子短期大学の鈴木です。数ヶ月前に話題提供のご依頼をいただき、このテーマを設定しました。設定した時点では、精神分析のなかで中核となっている2つの概念、「自我」と「無意識」に関して、日本の精神分析の本流のなかでどのように受けとめられて展開されていったのかということをお話しすることを想定しておりました。ですが実際に調べてみると思いがけず膨大な資料が出てきて、資料ばかりが大量に集まって、まだ分析しきれないところがたくさんあるという状態です。今日は、日本に精神分析が本格的に導入される前に、この2つの概念がどんなふうに捉えられていたのか、すなわち、精神分析は大正初期に導入が始まりましたが、その前後どんなふうに自我、無意識のそれぞれが受けとめられていたのかということを中心にしたいと思います。

自我について

日本で自我に対する関心が強く向けられるようになったのがいつ頃かと言いますと、明治20年代半ばからだと思われます。この自我の概念が流行りだした大きなきっかけは、イギリスの新カント派の哲学者 T.H.Green の「自我実現」が翻訳されたことでしょう。この翻訳を最も積極的行なったのは、帝国大学にいた中島力造でした。

中島は明治25年から26年にかけて哲学雑誌に「自我実現」説について論文を掲載しています。彼が言う自我実現の中身ですが「現実の自己に満足しないで、より高次の、あるべき自己に向かってそれを実現していこうと試みること」と述べられています。中島もまた当時の多くの学者と同様、知情意の三分説をとっていますが、3つのなかで特に「知の部分の練磨する」など、「知」の部分の強調をしています。また、意志は「情のエネルギーを抑圧するものだ」とも述べています。そうすると、

自我実現説（self-realization）は、今で言うところの自己実現という語と、原語自体は同じですが、ユングの個性化やマズローの自己実現の意味するところと構造自体異なるものです。

午前中のワークショップでもお話をしたのですが（※同日午前「日本の心理学史にかかわる海外資料収集調査研究」(企画 西川泰夫)において話題提供を行なった)、中島力造は帝大の心理学・倫理学・論理学第二講座の主任教授でした。その第一講座には元良勇次郎がいました。中島は倫理学を専門としていましたが、中島の倫理学は元良勇次郎の言うところの倫理学とは全く異なっていました。元良勇次郎の倫理学の話は今日の午前中に行ないましたので端折ります。

中島の倫理学は修身です。明治 33 年に修身の教科書の調査委員となり、明治 35 年に報告を出しています。そのなかで、中学第 4 学年から第 5 学年において倫理学を課すべきと述べています。その倫理学の中身はまさに彼の言うところの自我実現説に即したものでした。つまり自分に満足しないでより高次に向かっていく、自分を鍛練するということを強く要請しています。中島の倫理学（修身）の方向からの自我はこのように扱われていました。

さて、心理学のなかでの自我に話を移します。高島平三郎による『教育に応用したる児童研究』という本が明治 44 年に出版されています。彼は発達心理学的に自我を語っています。その内容はアイデンティティの確立というのと類似するところがあります。高島によると、青年期に自我意識が発達する、自我概念が成立する。そうすると自分が何であるかということや、社会や国家、家庭における自分の立場・責任などを知ることになる。これは自覚を持つことである。自覚というのは、自我概念の分化発達していった結果結実したものである、と述べられています。

中島力造は自我実現説を積極的に繰り返すわりに、その自我が一体何かという話については特に論を展開していません。それに対して高島平三郎は、自我がどうやって発生してくるのかということや、それを少し積極的に考察している点で違いがあるかと思えます。

なお、高島の本とほぼ同時期に、青年心理学の領域で、塚原政次が『青年心理』という本を出しています（明治 43）が、塚原が描いているテーマと、高島平三郎が描き出しているテーマとは全く問題意識が異なります。高島平三郎は個人の自我意

識の持ち方を非常に問題にするのに対して、塚原政次は集団を意図して書いています。塚原の『青年心理』には社会精神という章があり、タルドやル・ボンの説を導入しています。ほぼ同時期に出版され同じように青年心理に関して書いているにもかかわらず、スタンスは全く異なります。

それから他の研究者たちについてですが、塚原や高島より少し世代的に若い上野陽一には明治期に「自我につきて」という論文があります。上野独自の説を展開したのではなく、グートベルレットという学者の文献を紹介したものです。最初の部分で「自我というものは、普通にしていけば、自分がここにいるというのは当たり前のように受け止められるが、いざ研究対象とすると非常に難しいものだ。心理学的に言えば活動が帰せられる主人公、あるいは、精神活動の主権者の地位にいる」と述べられています。

自我は常に同一で変わらないものであるという位置づけがこの論文中にある一方、同じ論文中でリボーの説や精神病学の領域のことが紹介され、自我は変化するものであり強まることがあったり弱まることがあったりすると説明されています。自我は不変のものなのか変化するものなのか。どちらが正しいか妥当であるかという、自我が不変であるという結論が書かれています。しかしながら、この結論があくまでもグートベルレットの結論なのか、あるいは上野自身もそう考えていたのかというところははっきりしません。

元良勇次郎は「東洋哲学における自我の観念」という有名な論文のなかで自我の問題を扱っています。彼が意図した自我というのはフィヒテの自我であり、認識する主体としての自我を考えていました。元良勇次郎と他の人たちとの違いは、自我を実際に研究対象に据えていることです。その方法として禅を組んだのです。参禅体験に基づいてこの論文を書いています。

晩年近くの元良勇次郎は 1911 年に「個人意識と社会意識」という論文を書いています。そのなかで「自我の研究がとても面白い」ということを言っています。主観的に「今自分が〇〇を知覚している」ということを自分でまた意識する。これは、言い換えるとその活動が自分から始まり、また自分に帰ってくるというプロセスだといえます。

元良勇次郎は研究対象として自我を据えている。20 年後増田惟茂が自我について

書いています。元良勇次郎が東大心理の初代教授、次が松本亦太郎、次が桑田芳蔵で、増田は桑田の下で助教授をやった人物です。増田も自我について扱っていますが、研究対象とするのではなく研究法の一部として考察の俎上に上げるのです。リップスの感情移入説や、フォルケルトの他我確実説、シェーラーの他我知覚説を検討するなかで ich（ドイツ語の自我）について語ります。増田はそれを、どのように現象をみるかという研究者の視点の問題として取り上げています。ゆえに研究対象として据える元良とは全くスタンスが違う。北村晴朗先生が自我についての本を書いているらしいですが、最初に心理学のなかで自我の展開を扱ったのは、おそらくそれが最初ではないかと思います。

自我に関する興味関心はむしろ社会全体に存在した。その現われの代表格は文学界における私小説の流行です。それから、藤村操という一高生自殺の有名な話がありますが、自分自身について考えるということが時代精神として存在したわけです。しかし、心理学者がそういった個々人の内面の問題に関して積極的に取り組むようになるということはなかなか無かったようです。

前述のように T.H.Green の “self-realization” を中島力造が引用して自我実現とか自分自身を鍛錬するというような文脈で語っています。これはあくまでも私が漠然と感じ考えていることなのですが、精神分析に通う人、カウンセリングに通う人がよく口にする、「自分がない」とか「自分が弱い」といった日本語独特の表現がありますが、そのような表現を、明治中期以降の教育のなかで、自分自身を鍛えるということの重要性が繰り返し主張されたのを若者たちが浴びてきたという事情と関連づけることの可能性を、漠然と考えています。

無意識について

上野陽一の話から始めたいと思います。彼は自我だけでなく無意識についても書いています。精神分析の導入期にも名前が出てきますし、流行物をいち早く感知するのが彼の一種の才能といってもいいのかもしれませんが。今日のこの発表の準備に、明治期の代表的な雑誌をパラパラと見て、自我や無意識に関する記事をピックアップしてコピーをするという作業を図書館でしばらくやっていたのですが、上野陽一が精神分析の導入だけではなく、自我に関しても無意識に関しても早い時期に書いて

いることには非常に驚きました。無意識についての論文は東大に入ってからのもですが（「無意識的精神作用に関する争論」1905）、さきほどの自我についての論文は東大に入る前に書かれたものです。早くからその問題に着目する、彼の先見の明には驚くべきものがあると思います。

上野は心理学における無意識に関する論争というのは、「心理学に無意識という概念を入れていいかどうか、精神作用を意識的なものに限るのか、若しくは無意識的なものを含むのか」という問題に帰着する」と言っています。この論文は連載です。無意識は海外で様々な説が展開されていたわけですが、その諸説の解説や検討が行なわれています。

上野陽一自身が無意識に対しどのようなスタンスをとっていたのか、この論文のなかでははっきり述べられていません。しかしあれだけ早くから精神分析に着目して紹介をした人ですから決して理解がなかった人ではないと思います。

中村古峽が創刊した『変態心理』という雑誌がありますが、そのなかで小熊虎之助は潜在意識について次のように語っています（1919）。潜在意識は共在意識と無意識に分類される。共在意識とは、ヒステリーなどで意識が分裂した時に起こる第二意識とか、注意が他に向いている時に気づかれないものの意識のことです。意識の「フリンジ」、意識のいちばん端っこにある部分を共在意識といいます。一方、無意識とは大脳に残っているものだといいます。無意識は生理的なものであり、共在意識とは心理的なものです。この頃は潜在意識ということばがよく使われます。今現在は無意識ということばは意識の下にある抑圧されているものと理解されていますが、この頃心理的に抑圧されているものを語る際には無意識ということばはあまり使われず「潜在意識」とよばれていました。当時は多くの人たちが潜在意識と言っていましたが、「無意識」ということばももちろんありました。「潜在意識」と「無意識」の概念を区別していた節があるのは興味深いところです。

昭和の話になります。無意識について増田惟茂も語っていますが、ただ積極的にそれを認めているわけではありません。彼は昭和3年に発表した「無意識的精神作用についての試考」という論文の冒頭で、「意識と無意識の問題は、以前はあれほど盛んに論じられていたのに、最近の心理学ではあまり目立たなくなった」と言います。それはなぜかという、「現在の心理学では意識の内容の問題よりも、精神の機

能の問題に重心が置かれるようになったからだ」ということからまず書かれています。増田惟茂という人は帝国大学のアカデミズムの真っ只中にいた人ですが、彼は無意識を頭から認めるわけではなく、「考察文脈」からみて無意識の存在を認めるという立場をとります。言い換えれば無意識は初めから存在するものではなく、心理学的な考察を進めていく途上で登場する、考察をする上で無意識の概念を登場させなければ、人間の精神作用の説明が不十分になってしまう、そのときに無意識の概念が導入されるという捉え方をします。増田惟茂独特の言い回しで話すと、「心理学研究を行なうときは、意識内容を含む精神機能を、もう一度意識内容化する。何かの研究対象があり、その研究対象をもう一回追想することになる。これは言い換えると、最初にあった研究対象を包括的、上位的に見ることになる、この文脈からみれば無意識というのはあり得る」と述べられています。そして増田はこの論文のなかで、「フロイト一派のように無意識観念を認めることは、今日の我々の考え方に反する」とはっきりと言っています。無意識の内容や無意識のなかにある独特の世界は否定するのです。

この後の両先生からお話があるかもしれませんが、精神分析に対して最初に積極的に受け入れたのは文学者です。彼らは無意識という不可思議な世界に非常に興味を示しましたが、一方で心理学者は、小熊虎之助のような人もいましたが、さほど積極的ではありませんでした。ただ、自我という客体化するのが容易ではない概念に比べ、無意識は研究の「対象」として設定し易く、ゆえに議論が非常にし易く、結果的に自我に関するものに比べて論文の数は多くなるわけです。

実際に精神分析に携わった大槻憲二や丸井清泰たちが「自我」「無意識」のそれぞれに対してどういう捉え方をしていたのかという話までは残念ながらまだ至ってありません。今日の話は背景的なもので、当時の日本のなかでどのように「自我」「無意識」が捉えられていたのかを描き出すための、その前の準備くらいのものであります。引き続き、精神分析や精神療法の中心にいた中村古峽や大槻憲二や丸井清泰が理解したこの2つの概念の意味内容を明らかにし、そして「背景」の部分と「図」の部分の対照化する作業を行なってようやく本来のテーマに対する答えに近づけるのですが、そこまでにはまだ少し時間がかかりそうです。

それから、大槻憲二や中村古峽が患者さんたちと相対して実際に行なった技法が

どういふものであったのかを少し問題にしたいのですが、特に大槻憲二はフロイトの著作や精神分析の著作などを翻訳した本を書いています、大槻の技法とは自分自身を鍛えることでした。それは肉体五法とよばれ、皮膚をこする、お灸をすえる、大声を出すなど、フロイトの精神分析がやってきたこととは全く異なるものです。大槻自身医師ではなかったので自分でやれることに限界があるからそのような方法を採用したということもできるでしょうが、それよりもそうすることで自我を強化できると考えていた点に注目したいと思います。大槻の考えを精神分析という枠でくくろうとすると違和感が残ります。このギャップ、ズレをどう解釈するのかというのは考察の課題としてとても興味深いものと思います。

文献

- 日比嘉高 2002 <自己表象>の文学史 ―自分を書く小説の登場― 翰林書房
石原千秋 1999 漱石の記号学 講談社
菅野聡美 1994 大正思想界の関心事―自我、文化、及び恋愛を中心として― 近代日本研究, 11, 175-195.
北村三子 1998 青年と近代 世織書房
増田惟茂 1926 実験心理学序説前篇 至文堂
増田惟茂 1928 無意識精神作用についての試考 哲学雑誌, 43, 995-1012.
元良勇次郎 1905 東洋哲学に於ける自我の観念 哲学雑誌, 20 (付録), 1-40.
元良勇次郎 1911 個人意識と社会意識 哲学雑誌, 26, 129-147.
中島力造 英国新カント学派に就いて 哲学雑誌, 7, 411-421, 493-501, 581-584. 8, 647-651. 小熊虎之助 1919 潜在意識の話 変態心理, 3, 200-222.
大槻憲二 1940 性格改造法 東京精神分析学研究所出版部
大槻憲二 1944 性格と意志 東京精神分析学出版部
高島平三郎 1911 教育に応用したる児童研究 洛陽堂
塚原政次 1910 青年心理 金港堂
上野陽一 1902 自我につきて 教育学術界, 4, 563-568. 5, 25-28.
上野陽一 1905 無意識的精神作用に関する争論 教育学術界, 10, 391-395, 527-530, 643-646. 11, 40-44, 156-162. 12, 271-275.

「心理研究」における精神分析学

横浜国立大学 鈴木朋子

横浜国立大学教育相談・総合支援センター研究員の鈴木朋子です。今日は、雑誌「心理研究」における精神分析学の紹介について報告します。

本邦精神分析学の歴史について論じた北見(1956)の論文では、時期を四期に分けています。「精神分析学説の紹介期」、「精神分析の研究及び普及期」、「精神分析技法研究期」、「精神分析学研究体制の創立期」です。報告する「心理研究」における精神分析学の紹介は、「精神分析学説の紹介期」の時期にあたります。

北見は、「精神分析学説の紹介期」について、二つのルートで紹介が行われたと述べています。まず初めは心理学者達による紹介です。北見は「精神分析学は『無意識に関する心理学説』としてまず心理学者に注目された様である。」と述べ、1903年の佐々木政直論文、1911年の蠣瀬彦蔵論文、そして、雑誌「心理研究」における紹介と最初の単行本である1917年の久保良英の『精神分析学』を紹介しています。第二の紹介ルートは、同時期の医学者達によるものです。表1は、「心理研究」における精神分析学の論文をまとめたものです。今回は、心理学者が「心理研究」にてどのように紹介を行ったかに焦点を当て、表1に多く登場する大槻快尊、木村久一、上野陽一、そして久保良英の4人の心理学者を取り上げます。

大槻快尊

大槻快尊は、精神分析学を「心理研究」で最初に紹介した人物です。1880年に誕生。東京帝国大学心理学専修を卒業しました。心理学通俗講話会を設立して様々な研究活動を行い、1910年に僧侶になっています。大槻の専門は実験心理学で、カルタとりの反応速度などを調べていました(大槻、1911)。1912年から「心理研究」を創刊、精神分析学の論文を発表しています。大正1年創刊号には、「もの忘れの心理」、「やり損ひの心理」、「やり損ひの実例」、大正2年には仏教系の雑誌「密教」

32 卷に発表した「欧米の祈祷療法の話」という論文の中で精神療法についてふれて

表1 「心理研究」における精神分析学の文献

1912年	大正1	大槻快尊「もの忘れの心理」心理研究1(4)
		大槻快尊「やり損なひの心理」心理研究2(1)
		木村久一「精神分析法の話」心理研究2(2)
		木村久一「秘密観破法と抑圧観念探索法」心理研究2(3)
		大槻快尊「やり損なひの実例」心理研究2(5)
1913年	大正2	大槻快尊「精神療法の話」心理研究3(1)
		木村久一「不快の忘却」心理研究4(2)
		一記者「フロイド派の気遣」心理研究2(8)
1914年	大正3	上野陽一「夢と性慾と子供」心理研究6(2)
		上野陽一「フロイドの夢の説(上)」心理研究6(3)
		上野陽一「フロイドの夢の説(下)」心理研究6(4)
		上野陽一「精神分析法の起源」心理研究6(4)
1915年	大正4	大槻快尊「忘却と抑圧作用」心理研究7(1)
		上野陽一「精神分析者の観たる教育」心理研究8(1)
		上野陽一「昇華作用と教育」心理研究8(2)

います。その後、法華院の住職になり、1915年には東京帝国大学を去って、智山勸学院の教授になり、一年間のみ京都帝国大学で講師をしていますですがすぐに辞めています。この頃「忘却と抑圧作用」を発表しましたが、それ以降は心理学の世界で大槻の名前は見当たりません。名古屋の大須観音で住職となり、宗教の道を歩んだようです。

「もの忘れの心理」は、失策行為を紹介した論文です。この論文は、記銘、再生、催眠を説明した上で、記憶研究のひとつ、つまり、一般心理学のひとつとしてもの忘れを紹介しています。精神分析学というよりも、心理学の一分野といった位置づけです。大槻はフロイドが無意識の発見に至った経緯を次のように叙述しています。

「數年前、醫學博士フロイド教授が、此に注意し、ジョーンズ醫學博士や、其一派の諸學者が、精神診断法とか、或は精神分析法と云ふ方法を唱へ、吾々が聯想して行く途筋を研究し、聯想した思想や觀念から、精神状態を分析し、種々精神病の原因や、『つい忘れた』事や、『うつかり遣り損つた』事の原因を發きだし、斯る變態状態の現れた所以を診断することに盡力した。」(大槻、1912a)。フロイドの症例を紹介した後に、意見の衝突があった相手に何回も手紙を出し忘れた大槻自身の例や、

妻が結核を疑われた時に、結核で死んだ親戚がいたことをすっかり忘れた医者 の例をあげ、「それは抑圧である」として、「思い出す度に悲しく感ぜられるので、思い出すのが嫌である。従って忘れるほうが却って都合がよい」と説明しています。論文の最後では、小学校の生徒を対象に行なった教科用具の忘れ物調査について報告しています。この調査では、子どもの忘れ物について学年別に紹介し、お弁当用具の箸を忘れる者はいないが、嫌いな先生の教科書はよく忘れる。一、二年生は気持ちひきしまっていてあまり忘れないが、三、四年生になるとたるんでくるので忘れますと報告しています。この忘れ物の背景には無意識が関係しており、研究を続けると示唆が多い旨を述べて、一般心理学と精神分析学との橋渡しを行うスタンスからもの忘れの研究を紹介しています。

「やり損なひの心理」でも同様に、人間の行動についての一般心理学からの分類や概説の中で、失策行為が紹介されています。ここでは、失策行為の原因のひとつとして、フロイトの説が紹介されていますが、それ以外にも、脳の障害等も原因としてあげられています。「やり損なひの實例」、「精神療法の話」、「忘却と抑圧作用」では、心身の相関や精神療法について紹介し、特殊治療法として、暗示や催眠、精神分析法を述べた上で、「ブロイエルの一患者」の症例を紹介しています。

「もの忘れの心理」を中心に紹介しましたが、大槻による精神分析学の特徴は、精神分析学を誰にでも見られる日常の事象を説明する一般心理学の理論の延長として扱ったことと考えられます。

木村久一

次に紹介するのは木村久一です。木村は、1883年に山形で誕生。1912年に「心理研究」第二巻に「精神分析法の話」、「秘密観破法と抑圧観念探索法」を発表。1913年には東京帝国大学心理学専修卒業資格を取得し、「不快の忘却」を「心理研究」第四巻に発表。青山女学院、早稲田大学で心理学や教育学を教えました。後に、平凡社へ入社し大百科事典の編集長をしました。

木村は、「精神分析法の話」で、精神分析法について「むしろ精神探索法とても云ふ方が適当である」と述べました。そして、他人の心を知る方法として読心術があり、それと精神分析学は似たようなものであると述べ、科学的に心を読む方法にな

ったのが精神分析学であると紹介しました。木村の言う精神分析法には、催眠法、擬眠法、水晶凝視法、自動書記法、解夢法、連想診断法や脈拍測定法、電流試験法が含まれます。

「秘密観破法と抑圧観念探索法」では、秘密観破法には連想診断法・脈拍測定法及び電流試験法というものが応用可能であると述べています。ユングの連想検査の影響でしょうか、警察で自白させるために用いる方法として秘密観破法が紹介されています。抑圧観念探索法は、ヒステリーの場合にこれを使うと治るらしいと書いてあり、これはむしろ精神分析の通常の使い方だと思いますが、小さく紹介されているにとどまります。そして、水晶凝視法他を含めた全ての方法が抑圧観念探索法に応用が可能であると断言されています。

木村による精神分析学は、この学問の実際的な側面を強調したことが特徴と考えられます。しかし、この実際的な側面というのは、読心術の一種としての精神分析学の理解であり、学問的な科学ではなく、心を見透かすための手段としての科学として紹介されている意味合いが強いように思います。

上野陽一

次に紹介する上野陽一は、父親を早くに亡くして相当苦学をした人です。丁稚奉公をしながら一生懸命に勉強をして、東京帝国大学を検定合格の上で卒業しました。心理学通俗講話会を大槻と一緒に設立していることも大きな業績です。彼が精神分析について述べているのは 1914 年以降です。1914 年、「心理研究」第 6 巻に「夢と性欲と子供」、「フロイドの夢の説」上下、「精神分析法の起源」を發表し、翌年には「精神分析者の観たる教育」、「昇華作用と教育」を發表しています。1922 年以降は産業能率関係の仕事へ移りましたが、ライオン歯磨きの工場に入り、人を管理する、能率をあげるという側面から、実学としての心理学を研究し、産能短大を設立したことでも有名です。

上野による精神分析学の初めての論文は「夢と性欲と子供」です。これは幼児期の経験の重要性を紹介した論文です。五歳頃までに経験したことが大人になってからも影響を与えること、大人の夢の中に子供の頃に果たせなかった幼児性欲が現れることが紹介されています。今日の精神分析の理解と共通する部分が多く、精神分

析の理論を正しく理解した上で書いた論文と考えられます。「フロイドの夢の説」では、フロイトの夢理論を詳細に紹介し、「精神分析法の起源」では、アンナ・Oの症例について報告、ブロイヤーについても紹介しています。

「精神分析者の観たる教育」では、フロイド、アドラー、ユングの説を紹介しています。「昇華作用と教育」では、無意識が子供の職業選択や成績に影響を与えることを述べ、昇華作用は個人差が大きいので、教育は個人に合わせてすべきであると主張しています。論文の最後には、もし、今日の文明を維持して、さらに進歩しようと思ったならば、意識的に相当の指導を加えて、昇華作用を行なう本能的勢力を補っていかなければならない。つまり、昇華作用が変な方向に向かないように、社会的に適応する正しい手段で昇華ができるよう助けるのが教育であるとの結論に至っています。

上野による精神分析学の特徴をまとめると、まず、フロイドの幼児性欲と夢の理論を最初に正確に紹介したことがあげられます。そして、上野自身は、精神分析の教育面への応用について志向を持っていた人と考えられます。

先ほど鈴木祐子先生が上野について紹介されていましたが、私は上野がなぜ精神分析学をやめてしまったのかということをも不思議に思って調べたことがあります。すると、「学界ソゾロアルキ」に上野自身が、自分は飽きっぽく新しいもの好きで、新しいものを見つけるとやるけれどすぐ飽きますと書いているのを見つけました。上野はおそらく、精神分析についても、自我についても、もっといいもの、新しいものを追い求めていったために、極めずに終わったと思われます。今から振り返ると、精神分析の発展のためには、上野が他の事に興味を移し精神分析から離れたことは、非常に惜まれることだったと思われます。

久保良英

最後に、久保良英について紹介をします。久保は佐賀県で住職の次男として1883年に誕生。生まれた当時の名前は源吉丸でしたが、青年期に姓も名前も変えて、久保良英となりました。久保の名前について、「リョウエイ」と読むか「ヨシヒデ」と読むか二説ありましたが、官報の表記が「ヨシヒデ」となっておりますので、「ヨシ

ヒデ」と読むのが正しいようです¹。久保は東京帝国大学を卒業した後、1913年にクラーク大学に留学。帰国後講師を兼任しながら、児童教養研究所の知能部門の主任をし、1917年、『精神分析法』を出版し、雑誌「応用心理」を創刊したことで知られています。

久保と精神分析の出会いは、クラーク大学留学中でした。『精神分析法』の序で、久保は「予がフロイドでアドラーに関する知識を得るに至ったのは、全くホール先生の啓發によるもので、若し本書にて取る所があり、之によりて新研究の暗示を得る者があつたならば、そは一にホール先生の賜といふべきである」と紹介しています。つまり、久保は、ホールがフロイドやアドラーを紹介していたことが契機になって、精神分析に関心を持った経緯があります。

「フロイド精神分析法の起源」は「変態心理」第一巻に発表されました。これは後で述べる単行本『精神分析法』の第一章にあたる論文です。1917年に出版された『精神分析法』は、日本で初めて体系的に精神分析を解説した本になります。第一章は「精神分析法の起源」、第二章、三章はフロイドの理論が紹介されています。第四章「性慾と子供」はユングの研究が紹介され、第五章「神話と藝術的作品」は神話ではオットー・ランク、芸術ではフロイド、ジョーンズ、フェレンツィの理論の紹介がされています。第六章は「忘却と誤謬」、第七章「頓智・滑稽及び喜劇」は、久保自身が滑稽とか怒りといった感情の研究をしていましたので、それに興味があったためでしょうか、突然精神分析から話がそれて、滑稽の例として狂歌が紹介されています。第九章「結論」では、フロイドや精神分析の学派への反論として、シュテルン、パブロフらの意見が載っています。最後に「ユングの聯想實驗法」が紹介されています。1919年の再版には「アドラーの補償説」、ヒーリーの著書の紹介として「不良少年の精神分析」、「性格の分析的研究」「戦争と死」、そして「お伽噺の精神分析」が付け加えられています。最後の「お伽噺の精神分析」は一寸法師や竹取物語、里見八犬伝、グリム童話について精神分析的解釈を試みたものです。久保は児童心理学を専門としていましたので、特に物語の分析に関心を持ったのかもしれない。久保自身の結論としては、性欲関係ではなく、むしろ利欲関係とか、

¹ 久保しげ著『滴』の官報に、久保良英の読み仮名があるとの情報は、山本多喜司先生、大山正先生より教えていただきました。深謝いたします。

権力関係から親子間の関係が分かるのではないか、フロイトの言う性欲ではなくアドラーの言う権力の方が理由として説明できるのではないかと述べています。さらにその後、『精神分析法』が改訂され『快感原則の彼岸』などの翻訳をしています。

久保による精神分析学紹介の最大の特徴は、久保自身の積極的な意見が述べられていないことです。なぜかと言えば、精神分析は、ホールの影響を受けて興味を持った人ですので、久保自身が研究を進展させるというよりも日本に忠実に紹介する大儀を果たすことが久保の第一目的だったのではないかと思います。ただ、書かれていることからみると久保自身はアドラーの理論に共鳴していたところがあるのではないかと思います。フロイトの性欲論、幼児性欲にはあまり納得できないところがあったのではないかという印象はもちますが、実際にどうであったのかは、明言されてないので分かりません。

今まで紹介しました4人について簡単にまとめますと、大槻は一般心理学の一部として精神分析学を紹介しました。木村は心を見透かすための実学としての精神分析学を紹介しました。上野は「幼児性欲論」と「夢の理論」の初めての正確な紹介と、学校教育の関連としての精神分析学というようなスタンスでした。久保は「学問輸入」のための紹介で本人の意見はありません。

最後になりましたが、私自身の意見を述べさせていただきますと、「心理研究」を中心とした心理学者による導入期では、精神分析学は、それぞれの立場からの部分的な解釈による紹介が行なわれていたと考えられます。現代の精神分析理論と照らし合わせると、当時の紹介は、紹介者の立場や関心により、多少歪曲された可能性はあるでしょう。そして、あくまでもこれは紹介期であり、研究者が独自にフロイトの理論を発展させていく、或いは実際的な治療技法として論じていくことは、この時期には全く行なわれていないことがうかがえます。以上で雑誌「心理研究」を中心として、精神分析学がどのように紹介されてきたかをまとめさせていただきます。

文献

- 木村久一 1912a 精神分析法の話 心理研究, 2(2), 52-57.
- 木村久一 1912b 秘密観破法と抑圧観念探索法 心理研究, 2(3), 10-26.
- 木村久一 1913 不快の忘却 心理研究, 4(2), 1-13.
- 北見芳雄 1956 戦前に於ける日本の精神分析学発達史 精神分析研究, 3(9), 2-6.
- 久保良英 1917a 精神分析法 近世心理学文庫第三巻.
- 久保良英 1917b フロイド精神分析法の起源 変態心理 1(1).
(フロイド 久保良英(訳)(1930).快感原則の彼岸 アルス社 フロイド精神分析大系 6.)
- 久保しげ 1975 滴 若葉印刷社.
- 大槻快尊 1911 実験心理学 成美堂.
- 大槻快尊 1912a もの忘れの心理 心理研究, 1(4), 1-40.
- 大槻快尊 1912b やり損なひの心理 心理研究, 2(1), 16-45.
- 大槻快尊 1912c やり損なひの実例 心理研究, 2(5), 476-481.
- 大槻快尊 1913 精神療法の話 心理研究, 3(1), 44-73.
- 大槻快尊 1915 忘却と抑圧作用 心理研究, 7(1), 124-140.
- 上野陽一 1914a 夢と性慾と子供 心理研究, 6(2), 41-57.
- 上野陽一 1914b フロイドの夢の説 (上) 心理研究, 6(3), 3-20.
- 上野陽一 1914c フロイドの夢の説 (下) 心理研究, 6(4), 54-71.
- 上野陽一 1914d 精神分析法の起源 心理研究, 6(4), 97-106.
- 上野陽一 1915a 精神分析者の観たる教育 心理研究, 8(1), 77-89.
- 上野陽一 1915b 昇華作用と教育 心理研究, 8(2), 83-99.
- 上野陽一 1953 学界ソゾロアルキ 能率道, 11-14.

精神分析学の導入と丸井清泰、小熊虎之助

筑波大学 安齊順子

筑波大学人間総合科学研究科の安齊と申します。私は丸井清泰先生と小熊虎之助先生についてお話をさせていただきます。まず、西洋医学における精神医学の始まりから丸井先生までの流れ、その後は丸井先生の活動、小熊先生の紹介、まとめと考察を行ないたいと思います。

現在精神医学と呼んでいるものは江戸時代にもありましたが、それは漢方医学の中に分類されています。西洋医学流の精神病学を初めて日本で講義したと言われているのは、ベルツ教授です。その頃は、内科講義が先で、従属的に精神医学の講義がされていました。この辺りの問題については、「精神神経学会 100 年史」の中に触れられています。

東京大学は、「西洋医学所」と「蕃所調所」が合体してできた大学です。ベルツ教授の後は榊俣先生や精神医学の呉秀三先生がおられました。厳密に言えば、榊俣先生の後に片山國嘉教授が講義をされた時期もありますので、呉先生が四番目だとおっしゃる方もありますが、一般的には東大の医学部精神科三代目教授が呉教授ということになります。ところが、この後の丸井先生は、呉教授の弟子ではなく内科の青山先生のお弟子さんです。

心理研究には、先ほど鈴木朋子先生がお話してくださったような精神分析の様々なことがあります。その少し前に「哲学雑誌」に「ステーリング氏の心理学に関する精神病理学」という紹介があります。その中に若干フロイドやその事例が載せられていますので、現在のところはそれが最初の紹介ではないかと考えています。また、1912 年ごろ「心理研究」に色々紹介されることがありました。

丸井先生は、1916 年から 1919 年までアメリカのアドルフマイヤーの元へ留学されました。帰国後東北大学医学部の精神病学講座の教授となります。主に精神科医となる人や医学部の学生に講義をしていましたが、法文学部心理学専攻者にも精神

分析学を講義したことが分かっており、記録も残っています。

研究史としては、現在正統派精神分析学の流れというのは丸井清泰、古沢平作、小此木啓吾ととらえるのが自然だと考えられています。丸井先生についてご紹介したいことは、アメリカで心理学を学んで帰国した矢部八重吉という人物がいますが、その人が丸井先生よりも先にフロイドに会いに行き、日本における翻訳の許可と国際精神分析協会設立許可をもらってきます。ところがそのことを知った丸井先生はフロイドに手紙を出しているわけで、往復書簡はアメリカで保管されていました。最近日本精神分析学会で50周年記念大会があり、手紙は公開されたらしく、今、九州大学の北山修先生が保管されています。丸井はフロイドに著作の翻訳許可を得たいという手紙を出したわけですが、フロイドからはその許可はすでに矢部に与えてしまったと返事がきました。丸井先生は、自分は医師であるので自分の方に権利を与えてほしいという趣旨の手紙を出されています。その後、矢部の方は東京支部にして、丸井先生の方は仙台支部にしようということになりました。古沢先生が現れて、精神分析学会ができるということは別のところで発表していますので省略します。

その頃精神神経学会の方では色々な論争が行なわれていました。丸井先生は精神分析による神経症の治療を發表されています。当時森田正馬先生が、皆さんご存知の森田療法をつくり始めていた時期でしたので、特に神経症の治療に関して色々な論争が行なわれたと言われています。論争があったということはよく知られていますが、この頃の神経学会、精神医学の領域では神経症というテーマ自体がマイナーで、大多数の發表から見れば神経症のテーマが少ない中で、森田派と丸井派があったとみることができると思います。東京精神分析学研究所は大槻憲二がつくったものです。色々な資料を調べると、大槻憲二、長谷川誠也や矢部八重吉の三人が研究所をつくり、研究誌を出していることが分かります。大槻憲二の早稲田大学時代の先生が長谷川誠也です。彼は一般的には評論家としての評価を受けており、当時活躍した文学者一覧の論集に早稲田大学の長谷川先生の論文が入っています。大槻たちの研究所と丸井たちの東北大学グループは交流、雑誌の交換や会合をしており、写真も残っています。矢部八重吉が亡くなった後は、国際精神分析学会の支部は丸井の元へ移って、さらに古沢平作の元へ移っています。

元良勇次郎以後の研究については、今回も色々な方々がお話してくださいましたが、通史日本の心理学を読まれた方はご存知だと思いますが、俗に言う「千里眼事件」等々があり、催眠或いは催眠術に関する研究は、心理学者の間では行なわれていなかったのではないかということです。当時の様子は「こっくりさんと千里眼」という本に書かれています。

小熊虎之助という方について集中的に調べたことがあります。1914年大学を卒業して、大学院に籍を置いている時は、ちょうど元良勇次郎先生が亡くなられたり、松本先生が来られたり、福来先生が本を出されてお辞めになった時期と重なっています。1918年「精神病学における人本主義的運動」というタイトルでユングの論文の翻訳を發表しています。一般的に、ユングの本を日本で初めて単行本に翻訳したのは中村古峽によるものと言われていますが、論文として訳を公開したという意味では、小熊虎之助が先であると考えています。

小熊虎之助は「変態心理」の編集長である中村古峽とかなり協力をしていたようで、共訳というかたちで「ユング論文集 連想実験法」があります。また、日本変態心理学会という名前で「近世変態心理学大観」の翻訳を計画していました。この学会の実体は定かではありませんが、小熊虎之助と中村古峽が「近世変態心理学大観」というタイトルで10巻ぐらい翻訳の原案をつくっており、何巻に何を訳すということまで決まっていたようです。しかし、関東大震災のため頓挫したということがあちこちに書かれています。この頃翻訳しかけていたフロイドの訳稿も色々な変化があり、後々中村古峽が著者名でフロイドの翻訳書として出されています。その序文には、こういう理由（関東大震災）で出せなかった原稿であるということが書かれています。「近世変態心理学大観」は、ジャネや、今でいう精神病理学の研究者の翻訳をしようとしていたようです。

私が小熊虎之助に注目していることは、1927年（昭和2年）に心理相談のための開業をした記録があるということです。対象は、一般神経質等々ですが、実際にはどのようにこのような人々に接していたのかというのが定かではありません。小熊虎之助自身は催眠術を使い、変形森田療法を使ったと書き残してあります。どのような経緯で開業に至ったのかというと、森田正馬のいた病院として今でも有名な精神科の根岸病院で、いわゆるトレーニングをしたようです。その実体は分かりませ

んが、森田先生のおかげで病院へ行き、患者さんに接したという趣旨のことがあります。病気の人に接してある程度の理解をした上で、自宅で開業したそうです。神経症の治療という現在の観点から言えばそういうものを行っていたのではないかと考えられます。

小熊先生の術懐は晩年になり本を出した時に「臨床心理学者が、一般心理学界から外道として白眼視せられる傾向が当時相当潜在していたので、私にはこの開業？にかなりの決心を要した」と書かれています。大正時代心理学者一般からは、こういう臨床心理学的な小熊の活動は冷遇されていた。或いは、ちょっと違うのではないかと思われていたことが分かります。小熊先生は大学教授となって犯罪心理学の研究を買われ法学部に所属しています。ですから、異常心理学の研究が認められて大学教授になったのではないということです。また、戦後催眠の学会ができた時に小熊先生も活躍していました。

研究テーマに関して言えば、小熊先生はフランスの心理学にかなり親近感をもって論文を読んでいらっしやったようです。ビネーやジャネーのフランス異常心理学、日本でいうと精神病理学に近いものに興味をもっていたらっしやったので、病院で研修をしたり、実践や研究を兼ねて開業したのではないかと考えています。

鈴木祐子先生は、丸井清泰先生が無意識についてどのように捉えていたのかとおっしゃいました。私には分かりませんが、資料を見ると、北村晴朗先生が残されたノートがあります。それは丸井先生の講義に関するもので、精神病理学の中に精神分析学を混ぜて話をしていたようです。クレペリン、ブムケ、ブロイラー、ホワイトに加えてフロイドの参考書を挙げて、そういうことを話すということを最初の日におっしゃっています。丸井先生が残された精神病理学の教科書を国会図書館で見ることがあります。基本的には、アメリカの精神医学をまず紹介しようということがあり、当時の精神医学の教科書を色々とおりまぜて、その中に神経症治療の中の一理論として、或いは神経症の病理形成論として、フロイドや当時の精神分析の学術的な内容を混ぜて教科書を書かれています。フロイドだけ紹介しようと思ったのではないのではないかと思っています。アメリカ精神医学を紹介する中で、精神分析学を混ぜて紹介していたことや、精神神経学会での論争、本の依頼もありました。後々は精神分析学に関する本が多いので精神分析学ばかりを紹介した印象を受けま

す。しかし、まずアメリカ精神医学ありきを紹介したのではないかと考えています。

心理学では「千里眼事件」を機会に異常心理学ジャンルは停滞したと一般的には言われています。その時期偏見の中、小熊虎之助は研究を続けたのではないかと考えています。大正時代は中村古峽のような民間研究者によって変態心理学の研究が行なわれていました。現在で言う、神経症の人たちはどうしていたのだろうかということですが、大正時代には「新興宗教」とか「憑き物落とし」「霊術家」と言われる人たちがたくさんいたようです。そういうところに相談していたという可能性もあるのではないかと考えています。このような大正、昭和初期の活動が戦後にどのように関連するかは明らかになっていません。しかし、古沢平作は戦後の精神分析学をリードして、中村の催眠術の実演を見て感銘した成瀬悟策が催眠術の研究を続けています。これまではそのような説もあるとしていましたが、先日心理臨床学会で成瀬先生がそのようにおっしゃっていましたので正しいようです。戦後の催眠研究に小熊も関与したということで、今回お話した丸井先生の方の流れとしては古沢平作先生につながります。

文献

- 安齊順子 2000a 日本への精神分析の導入と丸井清泰-ジョンズ・ホプキンス大学医学部アーカイブ資料を中心に- 心理学史・心理学論, 2, 1-16
- 安齊順子 2000b 日本への精神分析の導入における大槻憲二の役割-雑誌「精神分析とその協力者・矢部八重吉を中心に- 明海大学教養論文集, 12, 41-49
- 安齊順子 2001 日本の「変態心理」と小熊虎之助 -ユング著作の翻訳と開業心理療法活動の紹介- 心理学史・心理学論, 3, 29-36.
- Anzai, J., Oe, Y., & Nakatani Y. 2004 Yaekichi Yabe, A Pioneering Psychoanalyst in Japan. *Japanese Bulletin of Social Psychiatry*, 13, 308.
- Blowers, G & Chi, sS.Y.H. 2001 Ohtsuki Kenji and the beginnings of lay analysis in Japan. *The International Journal of Psychoanalysis*, 82, 27-42.
- 蠣瀬彦蔵 1911 米國に於ける最近心理学的題目の二三 哲学雑誌, 26, 495-507.
- 妙木浩之・安齊順子 2004 草創期における日本の精神分析 精神分析研究, 48, 69-84.
- 佐々木政直 1903 心理学に関する精神病理学(其四) 哲学雑誌, 18.
- 佐藤達哉 1998 日本における精神分析の受容と展開 AERAMook 精神分析学がわかる 朝日新聞社 (Pp 96-103)

(詳細な文献を知りたい方は安齊 2000a, 2000b, 2001, に掲載の文献をご覧ください)

指定討論

恩田 彰

東洋大学の恩田です。三人の先生のお話を伺って、どういう点について話をすればいいのかとまだまだ見当がついていませんが、皆さんがお話されたようなことや、それらをベースにして感じたところや、そこから発想が出てくればお話をしてみたいと思っています。

まず、小熊虎之助先生とお付き合いをしましたのでお話をしてみたいと思います。大谷宗司という人は、超心理学（パラサイコロジー）を日本で立ち上げた者のひとりで私も一緒に 37 年ほどやってまいりました。日本超心理学会の初代会長が変態心理学の小熊先生です。「千里眼」事件という福来友吉先生の問題もあって、小熊先生は「心霊現象の研究」という心理学者ではめずらしい本を書いています。私も、超心理学を研究しました。超心理学は心霊研究と少し違いますし、スピリチュアリズムという、もうひとつ霊的なものの信仰というレベルとも違います。むしろ、先生は否定的な立場で、宮城音弥先生に少し近くなります。否定しながら関心を持っているわけです。しかし、すべてを否定するわけではありません。本物があることは知っておられます。それを肯定すると科学者としていかがわしいと思われるからです。福来先生が肯定的な立場をとったのでその反対をとったのです。批判的な立場で研究していくのは賢明なやり方だと思います。

中村古峽先生と「変態心理学」ですが、アブノーマルサイコロジー(異常心理学)は非常に重要な領域です。「千里眼」や「心霊現象」ばかりではなく、いわゆる臨床心理学や精神医学の基礎的な研究の領域です。「変態心理」という言葉には問題があります。実は、福来さんは念写事件で不幸なことがありました。これを否定する新聞記者などが入り込んで、迷信だと否定すると実験が妨害されます。そういう者が関わってきた非常に不幸な事件です。そのようなことで何が遅れたのかと言えば、異常心理学が遅れたと言いますが、まず臨床心理学が遅れたと思います。また、私

は「日本催眠医学心理学会」のメンバーですが、催眠心理学が遅れ、停滞しました。迷信とごっちゃになってしまうわけで発展阻害が起こります。福来友吉先生の明治39年の学位論文が「催眠術ノ心理学的研究」ですが、内容は「臨床心理学」です。催眠を通して患者を治療していくわけです。ですから「臨床心理学」が遅れてしまったわけです。それから「催眠心理学」が迷信だと誤解されたりして、未だに催眠の研究がその影響を受けたままです。科学からはずれたところで宗教的な現象がブームとなったわけですから問題が起きてしまったわけです。このような問題は「精神分析学」を文学者もやりますが、場合によっては科学的な面でないところで盛り上がると非科学的になり、「性欲論」が反発を受けました。そして、もうひとつ「精神分析」の研究で大事なことは、丸井清泰先生に古沢平作先生が批判的になったのはどこに問題があるのかと言えば、「精神分析」はいくら理論的に研究をしても分からないところがあります。教育分析で実際に体験を通してつかむほかにはないわけです。これが非常に大事な問題ですから、お弟子さんたちは古沢平作先生の「教育分析」を受けているわけです。

本を読んでも、人の話を聞いても分からないことが出てくるわけです。これが精神分析の非常に難しい点です。臨床心理学も臨床経験が必要です。その体験とその気づきの問題です。丸井先生は、精神分析を精神病学の中に組み入れているわけですが、こちらは直接の精神分析です。精神分析とは被分析者が分析者にぶつかったところから始まります。精神分析を知らない方が知識として知ったら精神分析を習得するのにかえってじゃまになります。初期の精神分析の体験でそこに何が起こるかという転移が起こります。初期のセッションで被分析者が向かっているのは分析者ではなく、子どもの頃のお父さんやお母さんや近親者などに対応してしまっています。そうすると、「あなたは私に対してではありません」と言うところから始まります。そして、抵抗や抑圧も起こります。それは体験を通すほかはないわけです。ですから、丸井先生と古沢先生との違いはそこですね。古沢先生はその点を十分に教育分析を受けていました。成瀬悟策先生も毎週一回2年間通って古沢先生に精神分析を受け、それから苦勞して脱分析をされたそうです。精神分析が分かったから、それと違う面を見出したということです。催眠研究の後動作学を創始されました。分析をやったので出られたのではないかという面もあります。今私は脱精神

分析を始めています。しかしとても容易ではありません。本を読んでも人に聞いても絶対に分からないのです。良い指導者について教育分析を受ける。自分が被分析者として分析をしっかり受ける。そうして初めて人の分析ができるのです。これが精神分析のいちばんの要点です。これを知らないと精神分析のことがなかなか分からないのではないかと思います。今また精神分析にも、新しい疑問がでてきて、苦闘しており、いまだ修行中という感じがします。

小熊先生が開業されたというのはよく分かったのですが、私には精神医学者という感じを受けます。ですから先生は精神医学をマスターしていらっしゃると思います。心理学者でありながら精神医学者と同じレベルの知識や教養と体験をお持ちの方で、犯罪心理学では公に認められたわけですが。しかし、中村古峽先生のように心霊現象とか、超心理学などの領域においても非常にすぐれた先覚者のひとりです。抵抗を感じながらやっていたらっしゃったということで、非常に素晴らしい方ではないかと思います。

上野陽一先生にはお会いしたことがないのですが、先生の息子さんの上野一郎先生(産業能率大学理事長)は私のやっている創造性の研究者です。戦後いち早く独創性の本を出したのは上野陽一先生です。好奇心が旺盛な、そのかたまりのような人です。きちんともものにして、次に移るのです。ある事が分かってしまえば次の事に移ってしまうのではないかと思います。先生は「能率学」を大成されます。それから「独創性の開発とその技法」(技報堂, 1957)という本を出版されました。私の創造性の研究は、マーフィ(Murphy, G)の影響を受けていますが、また上野陽一先生からも影響を受けています。独創性というのは、オリジナリティ(originality)ですが、私から言わせれば創造性の特徴を最もよく示している典型です。すなわち今までにないものを生み出す力です。

矢部八重吉さんが丸井清泰先生より早くフロイドに会い、日本におけるフロイドの著作の翻訳と国際精神分析協会支部の設立の許可をもらったのは、矢部の方が先駆的であり、丸井先生が後というのは当然です。矢部の没後協会東京支部が仙台支部と一つになったのは、歴史的な流れだと思います。国立と民間という関係から言えば、国立では東北帝国大学での丸井清泰先生の業績ですが、民間では大槻憲二が東京精神分析研究所での矢部たちと共につくった業績です。大槻先生の業績は国分

康孝さんも高く評価していますが、民間の人たちの活動も非常に重要です。国立と民間の機関の人たちが、お互いに、協力していたのはよかったと思います。古沢先生も民間の人ですが、大槻先生たちとうまくやっていたらよかったということは、精神分析の発展にとってはよかったと思います。それから、フロイドは自分のやり方を広めている人たちに対して、非常にそれを評価して、いずれも励まそうとしていた。そういう点では、大先生としての励ましがあつたので、みんながやりやすかつたのではないかと思います。来た者を拒まずにみんな受け入れてくださって、奨励してくださったということでは、日本の精神分析の関係者は、もう一度フロイド先生に感謝をしなければならないと思います。

元良勇次郎先生はアメリカのジョーンズ・ホプキンス大学でスタンレーホール先生の指導を受けました。そして、お弟子さんを派遣して、クラーク大学のホール先生のところには久保良英先生がいて、蛎瀬彦三さんもホールのもとで勉強していらっしゃいます。ホール先生はフロイドを非常に大事にされ、ユングも一緒に連れて来て講演、アドラーの話もいつも聞いていたとお弟子さんが本に書いたり、述べています。久保先生はアドラーが良いということですが、精神分析の「性欲論」は納得できなかったと思います。「性欲論」は半ば科学的で半ば非科学的という面があります。私が精神分析を学んだのは、モーゼス・バーグ先生です。モーゼス・バーグ(Moses Burg)先生は東洋大学の教授をされており、統合的精神分析学(Integrational Sociopersonal Psychoanalysis<ISP>)という精神分析学に基づく心理療法の理論と技法および研究方法の多次元システムを提唱していました。私は30年以上先生から分析を受けてきました。そこでよく言われるのは、「精神分析」には、科学的な面とそうでない面があるということをおっしゃっていました。バーグ先生がいうには、私(バーグ先生)のような外国人から分析を受けるのはいいというのは、半分は日本文化で半分は外国文化だということです。要するに外国人だから一方は、外国文化を地盤としている。他方は日本という風土に生活しているので半分は内側から見ています。彼は相当日本の文化が分かっているから外国と日本と半分半分で生活しているのでそれがよいと言っています。そこで、こちらの見方とあちらの見方の両方を見方ができます。おそらく異文化接触の問題も学問もそうです。精神分析でも「性欲論」を、文学の人には好きだと言う人と、こんなものは学問ではないと嫌がる人

がいます。なぜかと言えば「性欲論」というのは、意識化して話すのを拒否します。抑圧と抵抗があります。現実の体験の問題でそういう問題が起こります。ですから理論的なものだけではないということです。自分の体験だけで、好き嫌いとか抑圧とか抵抗とかの分析で起こるような現象がここに入ってきますので、そのような見方を考察することは、心理学史で見るとしても必要だと思います。

フロイドの「無意識の問題」については、増田先生はご自分なりに、「無意識の考え」を出していらっしゃるの、フロイド流の考えをおそらく認めないと思います。もちろん実験心理学の立場もありますが、必ずしもそればかりではないと思います。やはり体験上の問題があります。精神分析の場合にも、治療への抵抗の問題が起こります。そうした抵抗に気づき、乗り越えた時に本当に受け入れられることができますので、そういう面が無意識の探求のプロセスの中にあるのではないかという気がしました。

大槻快尊先生は、真言宗の智山派の僧侶でもあります。密教には治療もあるし、深層心理にもつながってきます。ですから、おそらくこういう面では精神分析学の研究で記憶の問題をされたけれども、連想実験でヴェント派からユング派へ移っていき、連想反応時間の速度を重視する研究から、連想内容を重視する研究に関心を持つようになりました。忘却との関連で抑圧の問題も考えています。密教の立場から、深層心理的なものを受け入れる地盤があって、それを受け入れられたということです。最後はお坊さんになったということですが、それは東洋的な、日本的なものに統合されたのではないのでしょうか。仏教の心理と西洋の心理は決して対立したものではなく、先生は西洋を超えて、ご自分なりに日本的なものへ統合をされたのではないかと思います。大槻快尊先生は、精神分析を捨てられたというふうには思えません。ご清聴ありがとうございました。

討論

鈴木朋子 恩田先生のお話を伺っていて、思い出したことを述べたいと思います。

実践の中で精神分析がどのように役立ったか、例えば、大槻の宗教の中で精神分析はどのように生きたのかとか、久保は児童教養研究所で心理相談を行なっていますが、そこで精神分析的な意見がどのように生きたのかを知りたいと思って探したことがありました。大槻に関しては全く資料が見つからず、大須観音の住職にうかがったところ、昔の住職は西洋の教会の牧師さんと同じで、村民たちの悩みを聞いていたから、精神分析はひょっとすれば役に立ったかもしれないし、役に立ってないかもしれないので分かりませんと回答いただきました。久保については、1920年の「変態心理講話会」で早熟児童についての例に対する回答としてこのような例が載っているのを見つけました。性的な早熟児童で10歳の男児が手淫の癖があり困るという児童相談について、久保は性的早熟の原因は先天性の精神薄弱や精神病等もあるが、こういうことを止めさせるためには、戸外で筋肉活動をさせるべきであると指導を行なったとありました。私は、この久保の対応は、現代の発達相談に近いものではないかという印象を受けました。先ほど、恩田先生は、フロイトの性欲論は受け入れがたいのではないかとおっしゃっていましたが、この久保の回答は、性的な行為から子供の気をそらそうという意図が強いもので、例えば何故癖が身についたのかという心的原因や、子供の精神性的発達については言及していません。フロイトの性欲論というのは、久保にとっては恩田先生がおっしゃったように受け入れがたいものだったのではないかと個人的には思います。

安斎順子 私は小熊虎之助先生について文献上で調べていましたので、どういう方だったのかが分かりません。恩田先生がお会いになったということですから、どういう方なのかを教えてください。

恩田彰 小熊先生がお年をとられてからお会いしましたので、70代ころだと思います。霊能者のような人と会うと、テレパシーみたいなことが起こるとか、透視のよ

うなことを起こったと言われました。そのことについて感動して何度も同じことをおっしゃっていたことを覚えています。なかなか飄飄とした方ですし、もちろん鋭い方です。フランス心理学をマスターしていらっしゃいますし、催眠の研究もされました。心理学者ですが、私たちから見ると昔の精神医学者といった感じでした。

藤波尚美 個人的に特に興味を惹かれましたのが、明治期の日本における自我の概念についてのお話でした。先日、日米の一般心理学教科書でウィリアム・ジェームズがどのくらい言及されているかを調査したのですが、日米で差が見られたものの一つに自我理論への言及があります。心理学史に関する章以外では、日米とも、ジェームズ・ランゲ説が圧倒的に多く言及されていますが、その次に来るのが、アメリカの場合は意識の流れと乳児の知覚です。物質的、社会的、精神的といった自我の構成要素はわずかしかな言及されていません。一方で日本の教科書では、アメリカ以上に一点集中的にジェームズ・ランゲ説が言及されていますが、その次に多かったのが主我と客我、自我の構成要素といった自我理論でした。意識の流れや記憶の分類よりも多くの教科書が言及しています。

お話をうかがいながら、日本において自我がどのように受け止められてきたかという点からも、この日米の違いが説明されるのではないかと感じました。精神分析導入後のことについても、また別の機会にうかがえたらと思います。

鈴木祐子 藤波先生が日米比較の資料として使用された一般教科書というのはおそらく最近出版されたものと思いますが、両群にはっきりとした違いが出るというのは非常に興味深いお話です。そして明治～大正時代のジェームズの日本でのとらえられ方にも特殊性を見出せると思います。といってもまだ詳細な分析検討はこれからなのですが、個人的には次の課題のひとつに据えているところのものです。その特殊性の背景として、まずはジェームズの紹介者でもあった福来友吉の一連の事件とその後の松本亦太郎を中心としたアカデミズムの展開が挙げられるでしょう。日本の心理学への精神分析の導入についてもこれはいえることですが、いわゆる「科学的心理学」の枠組みでは絶対に説明することのできないことがらや現象に対する、研究者側のアプローチの際の柔軟性の問題がまずは指摘できることかと思えます。